

おけるテクストの伝達・創造を扱うものであり、近代・現代の歴史学における史料の扱いに関する知見を与えてくれるものもある。

ヨーク大学は1976年にドア写本6巻のマイクロフィルムを手に入れ、ピーター・ビラーを中心に学生たちとの輪読が続けられてきた。その中にはジョン・アーノルドやクリス・スパークスもいた。ドア

文書プロジェクトとして史料編纂もなされ、それらの取り組みは現在ルーサー・サックヴィルに引き継がれている。地道な教育活動が後進を育て、国際的な人脈を結びつけ、今回のシンポジウムと論文集の刊行という研究成果に結実しており、今後のさらなる発展が期待される。

(図師 宣忠)

Michael BORGOLTE,

### *Die Welten des Mittelalters: Globalgeschichte eines Jahrtausends,*

Berlin, C. H. Beck, 2022, 1102p., €48.00.

とりわけ宗教制度の比較を主眼としたプロジェクトを通じて、ドイツ語圏における中世グローバルヒストリーを担ってきた著者による、その総決算とも言える大部の概論である。本書は、マスコミを含めて話題になった古代史家ミーシャ・マイラーによるユーラシア規模でのゲルマン人移動論 (Mischa Meier, *Geschichte der Völkerwanderung. Europa, Asien und Afrika vom 3. bis zum 8. Jahrhundert n.Chr.* Berlin, Beck, 2019; 本誌 12 号 163-164 頁で佐藤彰一による短評あり) の続刊という意味でも注目される。

第1部「導入：三分割された世界の伝統と他者の想像」では、500年から1500年という時代における、古代地中海世界で生成されたヨーロッパ・アジア・アフリカという三大陸からなる世界観念とその外部世界に対する想像の系譜を定位する。他方で第2部「他者の実情」で、第1部では想像の系譜とされた外部世界である「新大陸」ならびに太平洋島嶼が現実にどのような歴史を辿っていたのかを略述する。ここまでは900ページ弱ある本文のうち76ページであり、本書で論じられる世界の舞台設定を設えたという趣である。

全体の9割を占める第3部「エウフラシア：三大陸の人間世界の連鎖」は、著者が「エウフラシア」と定義したアフリカ・アジア・ヨーロッパという三つの大陸からなる世界におけるグローバルな連関を詳述する。第一節「ネットワークの失われた涯」では、ブラックアフリカと極地という、エウフラシアから外れた世界について説明する。第二節「コミュニケーション空間としての王国」では、アフリカ、アジア、ヨーロッパの諸国を概観し、最後に、中世における各地での巨大帝国生成の動きを指摘する。第三節「諸宗教の連関」は、前半で神道、ゾロアスター教、仏教といったユーラシアの諸宗教を論じたのち、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教の展開を示す。第四節「遠距離交易」では、中世前期・中期・後期の三つの段階に分け、ユーラシアの東西を

つなぐ交易について叙述する。

全体のまとめにあたる第4部「エウフラシアと中世のその他の世界」では、古代以来のエウフラシアという三大陸のまとまりを設定した上で、500年から1500年の「中世」を概観した結論を述べる。ボルゴルテは「エウフラシア」という見方を「中世」に持ち込むことの有効性を主張し、イベリア半島勢力が「新大陸」に拡大する15世紀末を「中世」の終わりに設定することで「中世」という時代区分の正当性を述べる。

さて、以上のような著者の中世グローバルヒストリーを私たちはどのように評価することができるだろうか。著者は本書に先立ち、三つの一神教の絡み合いという観点から西洋中世の概説を刊行している (*Christen, Juden, Muselmanen : die Erben der Antike und der Aufstieg des Abendlandes 300 bis 1400 n. Chr.* Berlin, Siedler, 2006)。そして本書での見方を出発点として、個別宗教が生み出す文化の干渉と変容という観点で、ルゴフやバートレットの描出したキリスト教中世とは異なる中世像を提示するドイツ流グローバルヒストリーのプロジェクトを立ち上げ、数多くの成果を世に出した。彼自身のグローバルヒストリー的アプローチはとりわけ弟子筋がまとめた論集 (*Mittelalter in der größeren Welt: Essays zur Geschichtsschreibung und Beiträge zur Forschung.* Berlin, De Gruyter, 2014) にまとめられている (『史苑』80-2 (2020) でも関連論考2本が訳出されている)。時代を輪切りにして新大陸から日本までの「中世」を並列評価しようとする英米圏やイスラム圏、アフリカ、インド洋 (といった旧植民地に関わる地域) と積極的にヨーロッパ半島の現象を結びつける仏語圏とは異なり、あくまでもヨーロッパ半島での現象にこだわるボルゴルテのアプローチは、ともすればキリスト教現象という枠組みを結局超えてないのではないかという批判もあり得るかもしれない。実際、本書の記述も、「エウフラシア」という概念を

出してきたにもかかわらず、ヨーロッパとの関わりの中で、アフリカやアジアの現象を（相対的に少ない紙幅で）整序しようとしていることは否めない。

以上のような読後感を得る大著であるが、随所に長期にわたるプロジェクトの成果が盛り込まれており、とりわけ宗教現象に関わる記述は、英語圏や仏語圏の成果に比べてもニュアンスがあるように思わ

れる。その点をとりわけ検討するための大著というように私には読めた。同様の掘り下げを今後キリスト教以外の他の宗教に対しても行い、その上で「中世エウラシア」の特徴を指摘することが著者の求めるグローバル性に適っているのではないか。

（小澤 実）

Georg CHRIST and Franz -Julius MORCHE (eds.),

*Cultures of Empire: Rethinking Venetian Rule, 1400-1700:  
Essays in Honour of Benjamin Arbel,*

Leiden – Boston, Brill, 2020, 516p., \$179.00.

ヴェネツィア海外領土 (Stato da Mar) 研究の第一人者である B・アーベルに捧げられた本書は、2015年7月にヴェネツィアで開催されたワークショップの成果をもとにした記念論文集である。本書は、ワークショップから引き継いだ3つの問い合わせ軸に編まれている。すなわち、ヴェネツィア人は自分たちの海上支配領域をどのように概念化したのか、海上支配領域はどのような繋がりを創出したかそれに依拠したのか、東地中海という特定の環境において海上支配領域はどのように形成されどのように根づいたのか、という問い合わせである。

序章では、編者である G. Christ と F.-J. Morche が、ヴェネツィア海外領土をめぐる研究状況を概観する。本書での中心的要素として提示される3つの要素、すなわち「帝国」としてのヴェネツィア支配領域の概念についての分析、ヴェネツィア支配領域についての個別地域の研究の文脈化、そして海上領域の諸アクターへの注目をふまえ、以下につづく全16章は、各々の研究者の関心にもとづき、さまざまな視点からヴェネツィア領にアプローチする。

第1部「帝国を建設する」では、葬送演説における古代ローマへの言及、ヴェネツィアでの建築物造営における過去の役割、そしてヴェネツィアとその陸上支配地域 Terraferma の貴族間の書簡のやりとりに焦点があてられる。続いて、より広く「帝国」としてのヴェネツィア支配領域の概念的枠組みについて、第2部「帝国を維持する」では、ヴェネツィア市民権と海外領土住民の関係が検討される。個々のアクターと彼らのあいだの紐帶により重きをおいた第3部「帝国を生きる」では、海上支配領域に広がる家門の紐帶と商業ネットワーク、そして文化的指向や宗教的アイデンティティのありようが検討され

る。第4部「帝国を接続する」では、ヴェネツィア支配領域の地理的特徴にもとづき、地域間および海上のつながりや、そのようなネットワークが可能にした知識の移転が強調される。最後の第5部「贈与する帝国」では、トランス・インペリアルな側面に焦点があてられる。とくに、ヴェネツィアからマムルーク朝への貢納、ヴェネツィアとオスマン帝国の外交的・商業的関係とそのなかにおける通訳の役割や、「贈与経済」のありかたが検討される。

本書で示されるさまざまな地域についての多様な事例とアプローチは、アーベルが切り開いてきたヴェネツィア海外領土史研究が、続く世代の研究者に多くの示唆を与えてきたことを物語る。本書全体および各部のタイトルにも採用されている「帝国」という語とともに、ヴェネツィア海外領土史を叙述することの是非については、編者ら自身も承知しているようにさまざまな議論がある。しかし本書は、ヴェネツィアは「厳密な意味では帝国ではなかったが、たしかに帝国を有し、帝国を心に抱き、帝国主義者的に行動し、同時に本質的には都市国家であり続けた」(23頁)とする立場をとり、むしろ「帝国」的支配がいかに観念され実践され経験されたか、という側面に注目する。本書のこのようなスタンスをふまえるならば、ヴェネツィアと、たとえば実際の帝国あるいは「帝国」と呼びならわされているような他の国家、領域的な広がりをもつ国家、さらには都市国家、そして海外領土の視点からみると複数の政治勢力の境界域に位置する地域など、本書はより広い観点において、時代・地域を超えた比較の視座を提供してくれるものであるといえるだろう。

（藤田 風花）